

『「計算力実態調査」を生かす』

計算力実態調査委員会 担当副部長 浜松市立中郡小学校 北村 祐大

年度初めの御多用の中、計算力実態調査に御協力いただき、ありがとうございました。

この調査は、年度当初に算数科の基礎・基本である数概念や計算力の実態を把握し、1年間の指導に生かしていくために実施しています。5月には「令和7年度計算力実態調査第1次報告書」を送付させていただきました。自校の結果と比較しながら御活用ください。

そして、今年度も結果の中から2年生②の問題に注目しました。昨年度の問題作成の際に検討し、下のように変更した問題です。

8 みかんが 5こ、りんごが 12こ
あります。
どちらが なんこ おおいでしょうか。

しき

こたえ
 が こ おおい。 ㊞

➡

【令和4年度】
81%

8 りんごが 4こ、みかんが 11こ
あります。
どちらが なんこ おおいでしょうか。



しき

こたえ
 が こ おおい。 ㊞

➡

【令和5年度】
79%

8 みかんが 6こ、いちごが 11こ
あります。
どちらが なんこ おおいでしょうか。



しき

こたえ
 が こ おおい。 ㊞

➡

【令和6年度】
74%

8 ガムが 5こ、ドーナツが 12こ
あります。
どちらが なんこ おおいでしょうか。

しき

こたえ
 が こ おおい。 ㊞

【令和7年度】
?%

この問題は、ここ3年間で変更を繰り返してきました。令和5年度には、絵がなかったものに絵を加え、令和6年度には、その絵をより分かりやすい絵に並び替えました。正答率が上がることを予想しましたが、令和4年度正答率81%→令和5年度正答率79%→令和6年度正答率74%というように下がり続けました。そこで、今年度は、また絵をなくしてみました。さて、正答率はどうなったと思いますか。結果は、昨年度よりも1%下がり、73%になりました。そんなに大きく正答率が下がることはありませんでした。

この部報を読んでいるみなさんは、この結果からどのようなことを考えますか。誤答例を見ると、ほとんどが、5-12という式の間違いです。毎年同じです。そして、誤答の原因の一つに、問題場面の理解不足が考えられます。しかし、先日、問題場面は理解しているのに、立式で間違えてしまう場面に遭遇しました。私は、先日2年生と長さ比べの学習をしました。合計6cmの線㊞と合計7cm5mmの線㊞のどちらがどれだけ短いのかを問い、算数の点数が高いある子に説明を求めると、「6cm-7cm5mmで1cm5mmになり、答えは、㊞の方が1cm5mm短いです。」と答えました。答えもあっているし、引き算をして考えることもできているのに、式は間違っていたのです。子供たちにとって、立式することは私たちが考える以上に難しいことなのだとことを痛感しました。子供たちは、ガム5個とドーナツ12個の差は7個で、ドーナツの方が多いいことは意外と分かっている

ます。絵がなくても問題場面を捉えることができている、式は問題文に出てきた順に書いているのではないかと思います。式の意味や式のよさを改めて押さえること、具体的な操作活動と式とのつながりを意識させることが大切だと思います。計算力実態調査の趣旨からは、少しずれてしまっているかもしれませんが、これからもこの計算力実態調査が日々の実践に活用できるよう、研修を重ねていきたいと思っています。

わり算のイメージをもたせるための「どきどきわり算」「にこにこわり算」

浜松市立和田東小学校

三浦 雅代

3年生で登場する「わり算」の学習は、「等分除」と「包含除」の2通りの意味があることで、文章問題になると意味が分かりにくく、難しいと感じてしまう児童が多い印象でした。そこで、校内の先生にアドバイスをいただき、こんな方法で導入をしてみたので紹介します。

「どきどき」わり算？「にこにこ」わり算？（3年生「わり算」導入）

- ①12個のあめを、4人で分けます。
- ②12個のあめを、4個ずつ分けます。
- ③12個のあめを、4人で同じ数ずつ分けます。

（①を提示）「わり算だ！」という反応でしたが、あめを実際に一人に6個、あとの3人には2個ずつ分ける場面をやってみました。「〇〇くんだけたくさんで、ずるい！」という意見が出て、この分け方を「ばらばら分け」「給食分け（食べたい子がたくさんもらう分け方）」と名付けました。

（②を提示）4個「ずつ」という言葉が付くので、同じ数ずつ配ることができるけれど、自分に配ってもらえるか分からず「どきどき」することから、「どきどきわり算」と名付けました。

（③を提示）「同じ数ずつ」という言葉に着目させ、登場する全員に配ることができて仲良く等分できるので、「にこにこわり算」と名付けました。

「どきどきわり算」「にこにこわり算」とネーミングをしたところ、子供たちは問題把握の段階でどちらのわり算か考えるようになり、わり算の理解が深まりました。どちらのわり算かのイメージをもつことが、その後の「 $10 \div 5$ になる問題作り」の学習にも役立ちました。

第2回 浜松市教育研究会 算数科研究部研修会のお知らせ

- 1 日時 令和7年8月1日（金） 13:00～16:30
- 2 会場 浜松市教育会館 大会議室
- 3 内容 ○講演会 横浜国立大学 教授 池田 敏和 氏
○演題 「社会に開かれた算数教育
～カリキュラム・マネジメントによる授業改善～」
○実践発表
発表者 荒熊 千佳 教諭（可美小） 中村 耕介 教諭（亀玉小）
助言者 宮本 直子 教頭（村櫛小） 太田健太郎 教頭（奥山小）
- 4 その他 ○今回の役員当番部会は、6部会です。集合は12:15になります。6部会の先生方には詳細をT-portにて別途お知らせしますので、よろしくお願いします。
○駐車場に限りがありますので、乗り合わせでお越しください。また、当日は、駐車場係の指示に従って駐車をお願いします。

担当 可美小 荒熊 千佳